

沼津市

# 明治史料館通信

1994. 10. 25 (季刊 年4回発行) Vol.10 No. 3 通巻第39号



明治17年9月 日枝神社祭礼 御前女行列図 (大古田忠雄氏所蔵)

例大祭の担当は氏子町村が年番でつとめ、白砂運・浜下りと呼ばれる神事で当殿・御前女という役目を果す少年・童女を選出した。神事を行う千本浜に至る当殿・御前女の行列は大名行列に擬したものであった。

## 日枝神社の祭礼

ぬまづ近代史点描 ②

昔は沼津でも観光や町おこしのためではない伝統的な祭りが盛大に行われていたようである。明治十五年(一八八二)の新聞記事から賑やかな日枝神社の祭典のようすを紹介してみよう。

○飛んだ雨天の障碍から廿四日が日延べになつた当地日枝神社のお祭りは翌廿五日も払暁より降りだったので支度の出来た若ひ衆は青くなつて弱つたり赤くなつて怒つたり真黒な空を白眼で黄色い声で非々囁して居るうちに午後四時頃から胴やら甲やらシブ／＼天氣になりか、つたので今まで青菜にシホ／＼と弱り返つた若衆連は忽ち氣息を吹返し勢ひ付て各町とも思ひ／＼の附祭り俄の趣向の蹴物を我劣らじと引だした町々は三枚橋、平、山王前に元日吉と何れも揃ひの浴衣に三尺帯手持までも一様に大張込で浮れ出しとり分本年の年番なる木瀬川石田の両村ハ例の行列花々しく騎兵に仕立し子供らか五六騎護衛に付たりしは中々の銘案大当り／＼足並そろへて千本浜まで蹴行くと外町々の踊り屋台は木瀬川まで此

夜のうちに残らず引込み(中にて三枚橋町の舞台は如何なる訳か一つ離れて別に警察署前へ曳つけたり一昨廿六はカラリと天気なりしかば神徳輝く三坐の神輿(みこし)ハ十二時過ドン／＼カツカの先立にて抜身の長槍(ながやり)例年の如く祠官(まじか)は馬に跨りて前後を衛つて渡御(とぎよ)ありたり木瀬川、石田の山車(だし)二本と舞台は前夜各町より同所へ集(こ)ひし屋台もろ共上土町まで曳出し繰込み(は)唯(は)太鼓の音につれて各々競(は)ふ花(はな)美(み)な振(は)事(こと)木瀬川村の一組の其踊(おど)り子(こ)ハ実(み)げべの桜(さくら)齡(ね)に似(に)合(あ)ぬ仕(し)こなしは有(あ)り中(な)村(むら)小(こ)蝶(た)さん□□お師匠(しやう)さんのお骨折(こぼれ)湛(たん)浮(う)見(み)へて大(お)出来(き)／＼三(さん)枚(まい)橋(はし)の舞(ま)台(だい)には当(あ)本(ほん)町(ちょう)の半(はん)玉(たま)寝(ね)子(こ)小(こ)悦(えつ)猪(ち)尾(び)助(すけ)姉(あね)妹(いもうと)両(りやう)人(にん)其(そ)他(た)ハ名(な)□□町(まち)内(うち)の若(わ)ひ衆(しゆ)子(こ)の急(いそ)拵(づ)ひの中(なか)々(々)美(み)事(こと)にいきました中(なか)に取(と)り分(わか)け目(め)に立(た)たるハ新(あたら)し田(で)町(ちょう)の舞(ま)台(だい)にて此(こ)の踊(おど)り子(こ)ハ名(な)にし逢(あ)ふ阪(あ)東(とう)照(てい)代(だい)が多年(おほ)年(ね)のお仕(し)込(こ)み当(あ)地(ち)名(な)代(だい)の評(ひ)判(はん)もの娘(むすめ)ぞろひの顔(かほ)揃(そろ)ひこのお祭(まつ)りの特(とく)別(べつ)一等(いち)珍(ちん)無(む)類(るい)とも称(なづ)すべし浮(う)れ出(で)したる若(わ)ひ衆(しゆ)の馬(うま)鹿(か)ケた衣(い)装(さう)ハ千(せん)状(じやう)方(ぽう)態(たい)実(じつ)に醜(みにく)態(たい)極(ごく)るなど鹿(か)爪(づめ)らしく云(い)もの、之(これ)れも太(おほ)平(へい)豊(とよ)年(ね)の余(あ)沢(たく)と思(おも)ふ

へばいと賀(が)すべしさて町(まち)々(々)を渡(わた)して仕(し)舞(ま)自(みづか)町(ちょう)へ夫(お)れ／＼曳(ひ)込(こ)しは午(うま)後(ご)十一(じゅういち)時(じ)頃(ころ)なりし夫(お)から後(ご)も幸(さい)に大(おほ)醉(すい)漢(かん)のブウ／＼も握(つか)み合(あ)の滅(め)茶(ちや)／＼騒(さわ)ぎも無(な)かつたのは寔(まこと)に頂(たか)上(かみ)上(かみ)当(あ)日(ひ)ハ八(や)幡(はた)神(かみ)社(やしろ)の臨(ま)時(とき)祭(まつ)とカチ合(あ)たが此(こ)方(かた)は中(な)村(むら)小(こ)蝶(た)さんの子(こ)供(ご)手(て)踊(おど)り奉(ほう)納(な)にて看(けん)物(ぶつ)人(にん)ハ山(やま)の如(ごと)く双(たわ)方(かた)へも雑(ざ)路(ろ)／＼でかけたので一時(ひととき)は中(なか)々(々)の雑(ざ)踏(たふ)なりし。『沼(ぬま)津(つ)新(しん)聞(ぶん)』明治(めい)十(じゅう)五(ご)・九(く)・二(に)八(はち)

日(に)枝(えだ)神(かみ)社(やしろ)の祭(まつ)礼(れい)は、山(やま)車(くるま)あり仮(かり)装(さう)あり手(て)踊(おど)りあり花(はな)火(か)ありといつた具(ぐ)合(あ)ひで、近(きん)世(せい)以(い)来(らい)、同(どう)月(げつ)の浅(あ)間(ま)神(かみ)社(やしろ)のそれととも沼(ぬま)津(つ)宿(しゆく)と近(きん)郷(きやう)近(きん)在(ざい)のひとびとを巻(ま)き込(こ)んだ代(た)表(ひょう)的(てき)な祭(まつ)りであつた。

江(え)戸(と)時(じ)代(だい)には年(ねん)々(々)華(か)美(み)なる祭(まつ)礼(れい)に對(たい)し、氏(うぢ)子(こ)町(まち)村(むら)では出(で)費(ひ)を自(みづか)粛(しゆく)するこゝもあつた。また右(みぎ)の新聞(しんぶん)記(き)事(じ)が書(か)れた明(めい)治(ち)の文(ぶん)明(めい)開(かい)化(か)期(き)には、民(たみ)衆(しゆ)の伝(でん)統(とう)的(てき)な習(しゆ)俗(ぞく)に對(たい)する批(ひ)判(はん)が加(か)えられ、「無(む)益(えき)な」馬(うま)鹿(か)な騒(さわ)ぎ」と擲(ちやく)揶(げ)されてもいる。しかしその後(ご)の近(きん)代(だい)社(しゃ)会(かい)の中(なか)でも祭(まつ)りは続(つづ)いた。かくも盛(さか)大(だい)な祭(まつ)礼(れい)が見(み)られなくなつてしまつたのは戦(せん)後(ご)のことである。

シリーズ  
沼津兵学校とその人材  
36  
沼津兵学校と化学



へ化学を教(お)えた沼(ぬま)津(つ)兵(へい)学(がく)校(がく)』  
明(めい)治(ち)元(げん)年(ねん) (一(いち)八(はち)六(ろく)八(はち)) 十(じゅう)二(に)月(げつ)時(じ)点(てん)での兵(へい)学(がく)校(がく)教(きやう)授(じゆ)陣(ぢん)には、「化(か)学(がく)方(かた)』として柏(かしわ)原(はら)淳(じゆん)平(へい)と桂(けい)川(がわ)甫(ふ)策(さく)の二(に)名(な)の名(な)前(まへ)があつた。明(めい)治(ち)二(に)年(ねん)に成(な)ると化(か)学(がく)方(かた)はな(な)くな(な)つたよう(よう)で(で)あり、柏(かしわ)原(はら)は火(か)工(こう)方(かた)、桂(けい)川(がわ)は沼(ぬま)津(つ)病(びやう)院(いん)三(さん)等(とう)医(い)師(し)に(に)変(へ)わ(わ)つ(つ)た。一(いち)方(かた)、沼(ぬま)津(つ)病(びやう)院(いん)には「製(せい)煉(れん)方(かた)」が置(お)かれ石(いし)橋(はし)八(はち)郎(らう)がその任(にん)にあつた。

蘭(らん)学(がく)の時(じ)代(だい)、化(か)学(がく)は舍(せ)密(みつ)と呼(よ)び(よ)ばれ、他(た)にも分(ぶん)析(せき)術(じゆつ)・分(ぶん)離(り)術(じゆつ)・製(せい)煉(れん)術(じゆつ)・離(り)合(が)学(がく)な(な)どとも称(なづ)され(れ)た。慶(けい)応(おう)元(げん)年(ねん) (一(いち)八(はち)六(ろく)五(ご)) 三(さん)月(げつ)、幕(まく)府(ふ)の開(かい)成(せい)所(じよ)では製(せい)煉(れん)方(かた)宇(う)都(と)宮(みや)三(さん)郎(らう)の提(てい)案(あん)をい(い)れ、始(は)めて「化(か)学(がく)方(かた)」とい(い)う名(な)称(せう)を採(さい)用(よう)した。沼(ぬま)津(つ)兵(へい)学(がく)校(がく)の化(か)学(がく)方(かた)もその延(えん)長(ちやう)にあつたとい(い)え(え)る。病(びやう)院(いん)のほうでは製(せい)煉(れん)方(かた)とい(い)う名(な)称(せう)を使(し)用(よう)して(して)いた(いた)が、その内(うち)容(よう)は同(どう)じである。

開(かい)成(せい)所(じよ)の前(まへ)身(みん)番(ばん)書(しよ)調(てう)所(じよ)に製(せい)煉(れん)方(かた)が新(あたら)し設(せつ)され(れ)たのは万(まん)延(えん)元(げん)年(ねん) (一(いち)八(はち)六(ろく)六(ろく)) 六(む)十(じゅう)〇(じゆ)であ(あ)つ(つ)た。軍(ぐん)事(じ)技(ぎ)術(じゆつ)の基(き)礎(そ)としての自(じ)然(ぜん)科(か)学(がく)を重(じゆう)視(し)した結(けつ)果(くわ)である。その担(たん)当(たう)だ(だ)つ(つ)たのが川(がわ)本(ほん)幸(さい)民(みん)・市(いち)川(がわ)齋(さい)宮(みや)・桂(けい)川(がわ)・宇(う)都(と)宮(みや)らである。桂(けい)川(がわ)は江(え)戸(と)で同(どう)僚(りやう)だ(だ)つ(つ)た宇(う)都(と)宮(みや)を沼(ぬま)津(つ)に招(まね)こう(こう)とした(した)が(が) (『蘭(らん)学(がく)の(の)家(け)桂(けい)川(がわ)の(の)人(ひと)々(々) 最(さい)終(しゆう)篇(へん)』)、それ(それ)は実(じつ)現(げん)せ(せ)ず、や(や)が(が)て宇(う)都(と)宮(みや)は新(あたら)し政(せい)府(ふ)に出(い)仕(し)した。桂(けい)川(がわ)も明(めい)治(ち)二(に)年(ねん)には政(せい)府(ふ)に出(い)仕(し)し沼(ぬま)津(つ)を離(り)れ(れ)た。

「徳(とく)川(がわ)家(け)兵(へい)学(がく)校(がく)掟(おきて)書(しよ)」によ(よ)ると兵(へい)学(がく)校(がく)資(し)業(ぎやう)生(せい)の学(がく)科(か)には英(えい)仏(ぶつ)語(ご)の中(なか)に窮(きゆう)理(り)(物(ぶつ)理(り)学(がく)) 概(がい)略(りやく)があ(あ)つ(つ)た(た)が、化(か)学(がく)はな(な)か(か)つ(つ)た。一(いち)方(かた)、本(ほん)業(ぎやう)生(せい)の学(がく)科(か)には、砲(ぱう)兵(へい)科(か)と築(ちやく)造(ぞう)科(か)に化(か)学(がく)があ(あ)つ(つ)た。と(と)な(な)ると、資(し)業(ぎやう)生(せい)から本(ほん)業(ぎやう)生(せい)に進(しん)級(きゆう)した者(もの)は一(いち)人(にん)もい(い)な(な)い(ない)ため沼(ぬま)津(つ)兵(へい)学(がく)校(がく)の生(せい)徒(てい)には化(か)学(がく)を学(まな)んだ者(もの)はい(い)な(な)かつ(つ)た(た)とい(い)うこ(こ)と(と)に(に)なる(なる)。

しかし、資(し)業(ぎやう)生(せい)石(いし)井(い)至(し)凝(ねい)が後(ご)年(ねん)書(か)いた履(り)歴(れき)書(しよ) (世(よ)田(で)谷(や)区(く)立(た)つ)郷(きやう)土(ど)資(し)資(し)



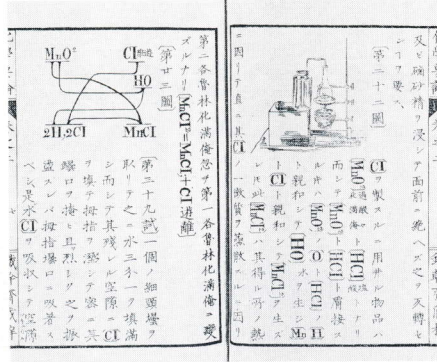
料館保管)には、兵学校で学んだ科目のひとつとして化学を掲げている。一方、同じく岡田正の履歴書(岡田正氏所蔵)の場合には、

「化学」という記載を誤記として消してある。果たして沼津兵学校で化学は教えられたのだろうか。

宇都宮の招聘失敗、桂川の早期上京などから、兵学校での化学教育は十分なものはならなかったのかも知れない。

〈静岡学問所の場合〉

沼津兵学校の姉妹校静岡学問所では、より本格的な化学教育が実現している。それは廃藩後の明治



杉田玄端『化学要論』より

四年(一八七二)秋に学問所に付設された伝習所でアメリカ人お雇い教師クラークによって行われたものである。

伝習所の実験室には豊富な薬品・器材がそろえられ、クラークは化学・物理・数学の講義のほか、綿火薬・硝酸グリセリン・ダイナマイト・水銀爆発薬などを使った危険な実験さえも行いえた(『静岡県英学史』)。

〈化学者をめざした出身者〉

兵学校の教授からは、その後も化学界に足跡を残した人物がいる。桂川甫策は大学南校や開物学舎という私塾で化学を教えた。教授方手伝だった熊谷直孝は、明治五年フランスに留学しアラン塾で化学を学び、帰国後は横須賀造船所の技術者として活躍、『小学農用化学』という訳書も刊行した。

資業生では、上京後大学南校の化学生徒に合格した田口卯吉と島田三郎の存在がある。田口は明治三年に医科志望者として兵学校から静岡病院に移り、沼津病院から静岡病院に転じていた石橋八郎に化学を学んでいたという経歴もあ

るので、化学への関心があったことも納得できるが、あの政治家島田が「余と共に化学者とならんとせり」(『鼎軒田口先生伝』)というのには後年田口も可笑しみを込めて述懐している。二人のその後の経歴が示すように、この化学科は開学せず、彼らは化学者への道をあきらめた。

静岡学問所生徒のほうからは実際に化学界で活躍した人物が出ている。伴徳政(一八五四〜一九二七)はクラークの助手をつとめた人で、東京司薬場(国立衛生試験場の前身)に奉職し、さらに周徳社という私塾を開き数学・化学・物理学を教えたほか(塚原徳道『明治化学の開拓者』、島根県や東京の中学校でも教鞭をとった(『同方会誌』27)。二宮正は工部大学校の化学科を第二期で卒業し、工手学校(工学院大学)主事などをつとめた。

〈関係人物の化学書〉

沼津兵学校の教授・生徒には、化学に関する著作をもつ人物も少なくない。林洞海『ワートル薬性論』(一八五

六)・沼津病院医師の林が幕府出仕以前に訳述した薬物書。

河野禎造『舍密便覧』(一八五九)・福岡藩士河野による我が国最初の化学分析の専門書。蕃書調所時代の兵学校三等教授並榊紳が挿絵を担当している。

桂川甫策『化学入門』(一八六七〜七三)・初編・外編・後編から成るが、外編と後編の一部は明治二・三年の刊行で「駿州桂川甫策・石橋八郎訳並註」とあり、沼津時代に病院製煉方の石橋と共同で行った仕事であることがわかる。初編は元素記号をアルファベットで表した我が国最初の本ではないかとされる(道家達将『日本の科学の夜明け』)。

杉田玄端『化学要論』(一八七二)・イリノイ大学教授ウ・ホストル著書の翻訳で、入門的書物。凡例の最後に「明治四辛未年十二月 沼津杉田擴玄端識」とあり沼津時代の仕事だったことがわかる。

熊谷直孝『小学農用化学』(一八七九)・農業化学概論といった内容で、原著はフランスのマラグチ。田中芳男の校閲である。

# お知らせ欄

◎企画展「沼津兵学校の群像」の終了について

7月1日から9月29日まで開催していた企画展「沼津兵学校の群像」は無事終了しました。開期中には多くの方に観覧いただき、沼津兵学校に対する関心の広さに思いを新たにしました。

また企画展に合わせ九月に四回にわたり開催した歴史講座も盛況で、兵学校についての新しい情報を学んでいただくことができました。同じく企画展開期中に四回実施した展示解説と映画「沼津兵学

校」上映会（当日無料開館）にも多くの皆さんに参加していただくことができました。

◎古文書解読入門講座の開催結果について

八月から九月に六回にわたって開催した古文書解読入門講座には四十五名（男性27、女性18）の参加者があり、例年のことながら熱心に学習する姿が見られました。

◎「平和を考える親子戦争史跡めぐり」の結果について

八月十六日に行った「平和を考える親子戦争史跡めぐり」には、小学四年生から中学二年生までの子供十一名とその保護者七名（七



▶ 歴史講座

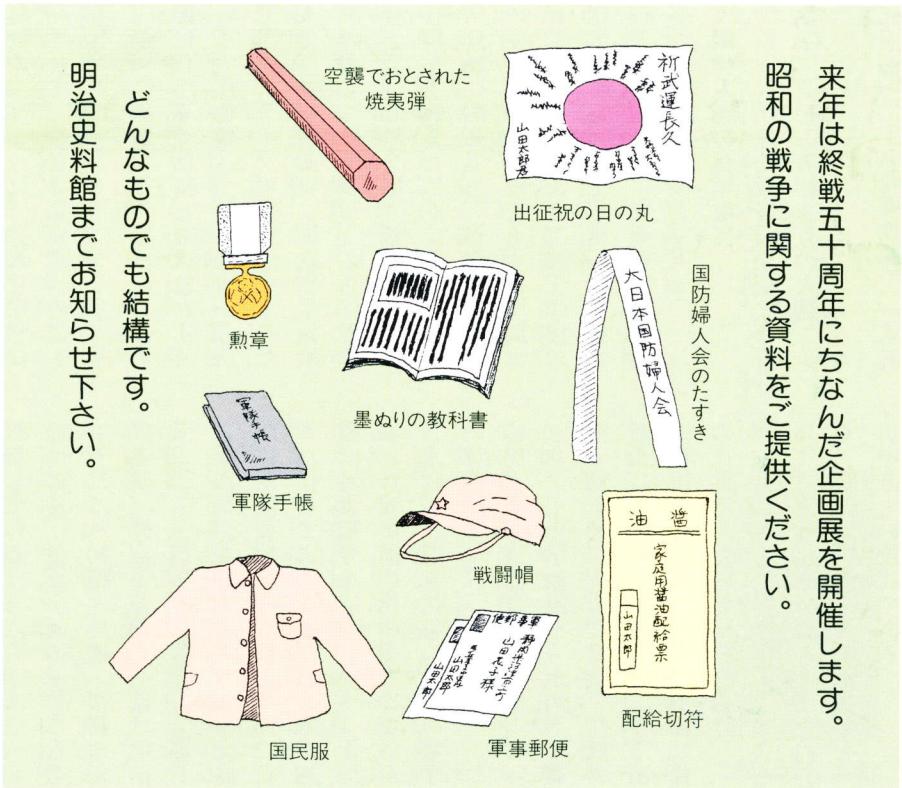


▶ 古文書解読入門講座



▶ 戦争史跡めぐり

来年は終戦五十周年にちなんだ企画展を開催します。昭和の戦争に関する資料をご提供ください。



どんなものでも結構です。明治史料館までお知らせ下さい。

組）が参加しました。お孫さんと参加して自身の海軍特攻隊員としての体験をお話しいただいた方もいました。とても充実した夏の一日になったものと思います。この企画は来年も続けます。

沼津市明治史料館通信 第39号  
編集 沼津市明治史料館  
発行  
〒410 沼津市西熊堂三七二-1  
電話 〇五五九二-三三三三五  
FAX 〇五五九二-五三〇一八